

六花  
5



2019  
りっかはいぐかい

鎮

麦 秋

山田六甲

二神の山裾にまで麦の秋  
麦秋のきぎすに耳を澄ましけり  
シベリアの俘虜髣髴と麦踏むは  
大市の竹の子飯を朝帰り  
煽るなかれ奥須磨浦の花ふぶき  
大枝の手を伸ばしあふ桜かな  
細川を挟んで花と竹林と  
四阿あずまやは暗し残花の雨明かり  
四阿に傘をたたみぬ名残花  
百度石洗ひをりたる花の雨  
花びらのゆつくり落ちぬ山の雨

老鶯へ傘をすぼめてみたりけり  
花は葉に令和の御代となりけり  
石段の熟してゐたる遅さくら  
もののふに石段滑る花の城  
亀田家の大山さくら咲きにけり  
佐用に來て雉子の声に目覚めけり  
春の炉の大きな炭をつぎにけり  
百千鳥そのなかに遠蛙かな  
花あふぐ水のやうなる顔を持ち  
血糖値測つてゐたる花の朝  
故郷に住むは不幸か鮎の川

桜山記の亀田邸を包む大きな山桜を  
ずっと見逃していた。亀田氏が多忙の  
中日程を調整してくれ、桜山の花が咲  
いた、と連絡があり急遽駆け付けた。  
周囲を見渡してもすでに桜は終わって  
いるがこの大樹は山桜の中でも遅いの  
だという。彼は明日朝神社の春祭りに  
参加してから、伊予に帰郷するという  
のに、医者に止められている日本酒を  
たらふく呑んで酔いが回ると、同級生  
に電話をしようという。5、6の人に電  
話をして私に代わってくれた。電話に  
出た男たちのほとんどは病気が奥方が  
入院か亡くなっている。以前一緒に桜  
山へ来た奈良のZ君は車の免許証を  
返した、という。元気な頃は患者のリ  
ハビリ担当だったのに、今は自分がリ  
ハビリしてもらっていると嘆く。甲子  
園球場のグラウンド整備責任者だったK  
君は養子に入った妻が亡くなり妻の母  
が残った。その介護を亡くなるまで尽  
くし責任を果たしたら、足許がおぼつ  
かなくなつたという。亀田君が伊予に  
帰り着くと、早速同級生のS（酒で家  
族に見放され介護施設に入所中）を見  
舞いに行ったらすでに亡くなつてい  
た、と電話をくれた。

雪嶺抄

塩の桶

笹村 政子

鶯や空より風の鶴林寺  
浅春や乾ききつたる音の絵馬  
みそぐ手に柄杓の水の温みけり  
淡雪のおのれの影に消えにけり  
残雪や牧場の柵に塩の桶  
残り鴨大きく羽根を使ひけり  
末黒野や土竜の穴のとびとびに  
剪定の風に木屑の吹かれをり  
枯芝に明るき起伏ありにけり  
時刻む亡夫の時計鳥雲に

残りたるいのち大事に春を待つ  
身をめぐらせて待春の風見鶏  
立ててすぐはためく幟一の午  
独り言つ洩らして留守居春炬燵  
建国日お子様ランチに国旗立つ  
夕東風や駆けて戻れる子の使ひ  
引く波に礁離るる屑鹿尾菜  
地も空も埃にまみれ春疾風  
病癒え佐保姫と野を歩きたし  
やつと春家族の許し得て散歩

# 鶴亀の干菓子をつふみ女正月

住田千代子

鶴亀の干菓子をふふみ女正月  
手の切れるほどの青さや寒の月  
行く鳥の一羽遅れし寒茜  
炬燵より失せしパズルのピース出づ  
枯芝にボールの光り跳ねてをり  
大鍋に狭しと煮ゆるおでんかな  
咲きかけて沈黙に入る冬薔薇  
池の面の青々として寒の明け

つるかめのひがしをふふみめしようがつ すみだちよこ

令和元年の巻頭句、夢風撰を飾ったのは鶴亀というまことにおめでたい句。女正月とは正月元日を中心とする大正月を男正月というのに対して、十五日を中心とする小正月を女正月とした。暮れから正月にかけて多忙を極めた女性がほっと一息つくと受け止められているようである（飯田龍太）。十五日には、女性たちが集まって御馳走を持ち寄り食べて飲む。一息つくとお茶菓子が出た。しかも鶴亀をかたどったおめでたい菓子で、口を含みながら、お開き前の談笑をしているのだろう。「ふふみ」は口を含んだ状態であるが、つぼみ、という意味もあり、女性の口もとの笑みを思わせる柔らかな言葉の斡旋がいい。

雪卿集 せつけいしゆう

志方 章子

永田万年青

寒薔薇や遠くに來たる甲斐のなし  
寒牡丹膝をつきては覗きけり  
雪踏みのなされし後を有難く  
神様の作られし色竜の玉  
侘助の掛けてありたる床柱  
雪達磨作りしあとの黒き土  
息詰まるやうに降りけり小米雪  
大氷柱落ちて眠りを覚まさるる

外灯の歪みてをりし冬の川  
左義長に近づきすぎる親子かな  
春の雪いきなり犬の駆けだせり  
春の雪風に流れて川に入る  
春の雪汚れを淡く覆ひけり  
寒晴れや空に入りたる槌の音  
約束を忘れさせしや寒の雨  
砂浜を引きずられぬいかのぼり

藤生不二男

葉牡丹の渦にやはらぐ日のありぬ  
降り出せる雪をとどめて寒椿  
長靴の泥を落とせり日脚伸ぶ  
降る雪の影を曳きたる水面かな  
臘梅や日のとろとろと沈みゆく  
下萌や蹄の音の揃ひをり  
箒目の消えゆきにけり春の雪  
遠山の霞み暮れけり梅二月

升田ヤス子

風花の肩に払ひし指濡れて  
古漬けの樽さかしまに覗きけり  
豆の皮ゆるびてゐたる福茶かな  
置き薬減らずにありぬ春立てり  
青ぬたや酔の角のよく取れてゐて  
芽吹かんと枝垂れ柳の枝を反らす  
日輪の水影に鴨消えにけり  
鴨帰る束の間の影水に置き



出口 誠

住田千代子

寢床から出られぬほどに春寒し  
青空の青そのままにいぬふぐり  
一本の枝に一つづつ梅の花  
春の宵不安の薬飲めぬまま  
久々の電話が長し春の朝  
植木鉢倒されてをり春の昼  
菜の花の傾きながら咲いてをり  
菜の花の頂に丸く咲いてをり

鶴亀の干菓子をふふみ女正日  
手の切れるほどの青さや寒の日  
行く鳥の一羽遅れし寒茜  
炬燵より失せしパズルのピース出づ  
枯芝にボールの光り跳ねてをり  
大鍋に狭しと煮ゆるおでんかか  
咲きかけて沈黙に入る冬薔蘇  
池の面の青々として寒の明け

善野 行

谷口 一献

つがひ鳴しづかに水脈を重ねけり  
日溜りに蜜柑の皮を並べけり  
北風に地震の記念の半旗かな  
一塊の落葉となりしつむじ風  
けふの風一枝の春と出会ひけり  
春雪の光充ちたる駅舎かな  
よべの雪末黒堤に残りけり  
寄合の仕舞を急かす春の雪

推敲を重ねし一句初便  
春浅し妻に言へない夢ばかり  
呑み干せし銚子を倒す余寒かな  
一寸だけの気分にならぬ遅日かな  
春節の提灯残る南京町  
辛夷咲く雨の明るく降りにけり  
飯蛸の半分囓り腑に落ちる  
うららかや偶に昼酒てふことも

# 雪樹集

廣畑 育子

赤松有馬守破天龍正義改め

赤松 赤彦

春寒し解体に飛ぶ土埃

蟻螂の逆さまのまま凍ててをり

耕の人竹内まりあ聴きながら

決まり手は逆とつたりの初相撲

春ジャケット舌足らずの子駆け行けり

冬の車窓一瞬見ゆる逆さ富士

水仙の川面に青き空ありぬ

古希迎ふ報せか今日の春の雪

ぽけつとの臘梅香る指の先

溪谷の橋揺れてをり春の雪

風花や海山近き神戸愛し

木の股に残りてゐたる春の雪

田尻 勝子

延川五十昭

泉水の中の島にも春の雪

江南の菜種畑の車窓かな

雑踏の隙間に落ちる牡丹雪

恋猫をしかる声ある旅寝かな

如月や一瞬抱きしめられてゐし

虚子名づく銘酒の蔵や梅の花

明晰な竹馬の友と小正月

酒蔵の娘に見送らる春の雨

小春日やケーソンに波打ちつけて

春場所の番付を待つ鬣屑かな

青春や真只中に冬いちご

梅一枝挿して笑顔の若女将

平居 濤子

大内 幸子

術前や白木蓮のふくらめる

雪時雨向かふの尾根に陽の欠片

凧や水面の塔を崩し去る

急行の止まらぬ駅舎斑雪

畦焼きの煙平城宮趾へと

はらからへ季節見舞の梅だより

山焼の始めを告げし花火かな

眠る山工場のチャイム川越えて

片方の眼の奥に野火なほ燃ゆる

祥月の巡る速さに梅白し

スリッパの中に居残る福の豆

淵となり瀬音となりて雪解川

江見 巖

延川 笙子

大寒や神鈴の中たてこもる

楠の無骨な拳春の雪

紅梅や郵便夫来る認印

蕾ある薔薇の切り株春の雪

薬玉の進水式や冴返る

芦に立つ鷺の目哀し春の雪

立春や駅の硝子にそばうどん

粗櫛の巣箱古びて春の雪

心音の地の底よりや草萌ゆる

走り根に足取られさう春の雪

牧開き仔馬のかける鳥轍図

雨上る菜の花畑輝けり

り  
っ  
か  
し  
ゆ  
う  
六花集



5月到着順

菊谷 潔

雨は雪に目まぐるしさにきざす春  
風色や梅数輪の事ながら  
梅が香や春さだまらぬあはきゆき  
香に香や鼻をくぐりて花を見る  
閑さや梅満開の日の夕べ

磯野青之里

そもそもは鳥の糞から実万両  
立春の陽の匂ひなり悉く  
裏道の余寒が足にからみつく  
同じ風受けて麦踏む父子かな  
うりずんや東シナ海基地の島



春寒し解体に飛ぶ土埃

最初この句はマグロの解体ショーかと思つたが、家屋の解体の光景だつたのだ。今後はこのように家屋の解体はますます増える。

空き家で放置しておく固定資産税

廣畑 育子

が三倍になると言われる。だとすると政子などはさつさと家屋を処分しておいたから、子や孫に相続する人に迷惑はかからない。

春早い時期に解体して、土ぼこりがたつのも昔であれば一方、黄砂の現象のように春には土ぼこりが舞い上がるのであろう。桶屋ももうないが。

泉水の中の島にも春の雪

田尻 勝子

「にも」が気になる。逆にこの句を「には・なる」とする考えの方が印象鮮明な句になる。春の雪は積もつてもすぐに解ける。人の踏み込まない池の中にある小さな島にこそ雪が鮮明にあると言えがいい。

延川五十昭

江南の菜種畑の車窓かな

この人中国の大ファン。「江」は中国の長江(揚子江)を指す固有名詞で、「江南」はその南岸地域全体を表わす。その規模は想像をはるかに超えて、絶景。絵にも言葉にも描けない壮大な菜の花の光景で、言葉を失つた俳句なのだ。平凡な写生報告だが、これ以上を求めの方が無理な話である。老婆心ながら言つておくが「車窓」は言わないほうがいい。旅行に間違いないが、これはいかにも観光俳句ですよ、と言つているようなもの。話が変わるが、そろそろ俳号を変えたいと時折言。元号に従つた名前前で五十昭になっているが、いまさら本気で変えるつもりはないようだ。延川五十令とか延川五十和、延川五十肩とするのもいいかなものだろう。今の俳号で最高なただから。